

冬をあそぶ
——自己発揮と協働——
カリキュラム・デザイン^②

pocket
10th
Anniversary

インタビュー

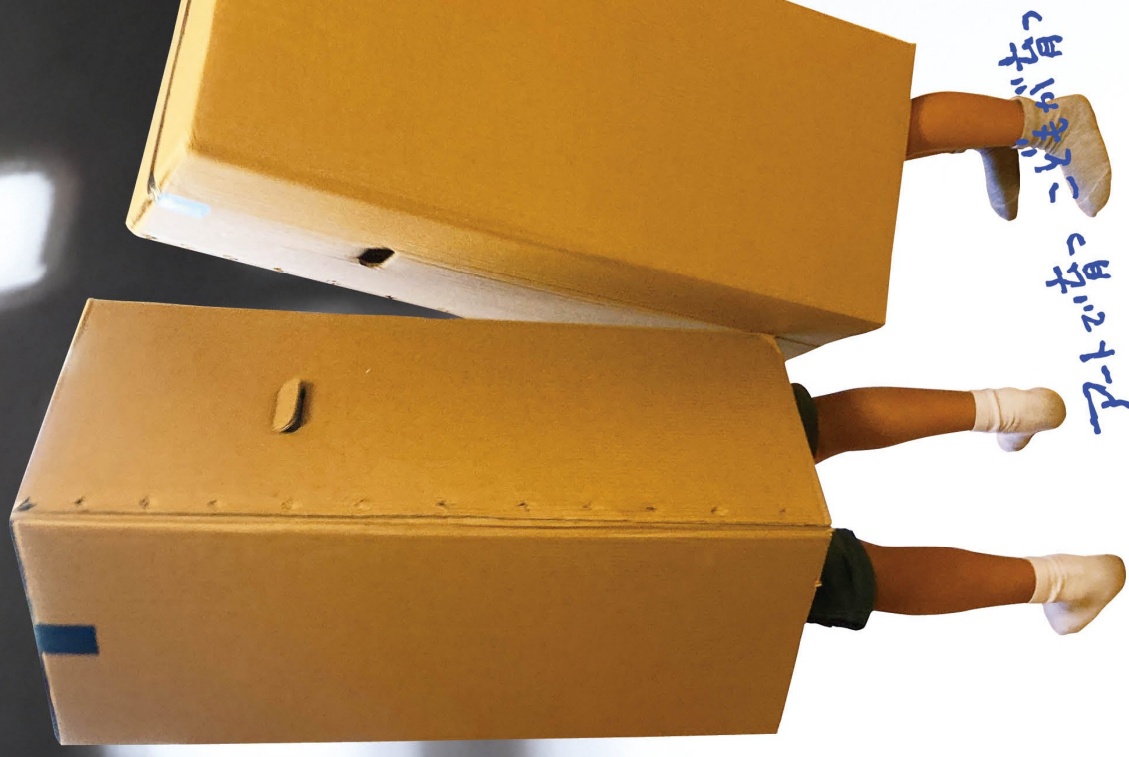
森岡督行さん

森岡書店 店主

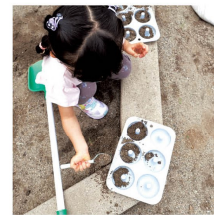
美育 NAVI 訪問レポート

「アート」「造形」「表現」を語らない
そこにあるこどもの姿から
見えるもの

山形大学附属幼稚園（山形県）



アートで育つ
こどもが育つ



「アート」「造形」 「表現」を語らない そこにあるこどもの姿から 見えるもの

美術・造形教育においてよく言われる「こどもの遊びのプロセスが大切」、「表現を受け止める」といったフレーズ。ところが、そう言いながらも、私たち大人は、こどもが「描いたり作ったりすること」や「できあがった作品」に安心感を得て、こどもの姿を語ってはいないだろうか——。今回、山形大学附属幼稚園を訪ねて、そのことに気づかされました。保育で何を紡いでいくべきか、山形大学附属幼稚園元教諭の倉岡寿幸先生や現役保育者のこどもの育ちを喜ぶ日常の景色を紹介します。

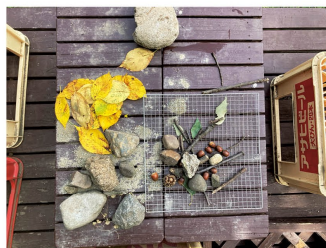


biiku-navi report

美育NAVI 訪問レポート③

山形大学附属幼稚園
山形県山形市

今回のナビゲーター 椎橋げんき
(白百合女子大学)



担任は小学校教諭、 「遊び」への戸惑い

山形大学附属幼稚園は、附属幼稚園の専属教諭が保育に携わるのではなく、県内の公立小学校との人事交流により職員が配属されます。そして、幼稚園教諭免許を保有する小学校教諭が担任をし、大学が採用している職員は副担任（非常勤）として勤務しています。

現役の小学校教諭が保育を行う——。そこで問われる「遊び」への戸惑いは、とてもまっすぐで純粋なものでした。今回、こどもと「遊び」込む感覚を陶冶していくことから起こる小学校教諭の思

いに触れながら、保育現場で「遊び」を当たり前として語ることができる保育者の視点の豊かさ行き来し、こどもの遊びを改めて感じることができました。

溶け込み、焚きつけ、調和する。 こどもの「遊び」の要石

園の要覧にある保育日程によると、午前中は「自ら選んだ活動の時間」。園庭を選んだこどもたちは、あちこち移動しながら遊ぶ子もいれば、園庭のまんなかでずっと1人で遊んでいる子もいます。保育者は、こども一人ひとりの遊びの邪魔をせず、ちょうどよい加減で

見守りながら、時には一緒にのめり込んで遊びます。そのやり取りを通して、こどもは今興味があること、楽しんでいること、そして自分自身を受け取ってもらえていると実感するのでしょう。この文化を支え、更新し続けている背景には、長年園に勤める副担任の保育者の存在があります。

「あまりにも溶け込んでいて、先生を探すのが本当に大変」というくらい、こどもも保育者も遊び込む時間。そこからはたくさんのこどもの生活音、こどもの声が聞こえます。そして、大人の声はほとんど聞こえてきませんでした。